10/6/2009

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊

S. Ashina

後期オリエンテーション

＜ **2009** 年度の講義概要＞

テーマ：キリスト教思想における社会・政治・民族（３）

現代世界において宗教は民族とともに、しばしば深刻な対立要因の一つと見なされている。たとえば、キリスト教とイスラームとの対立、あるいは一神教と多神教との対立などといった話題は、日本でも広範に見られるものである。こうした対立図式自体が有する問題性は批判的な検討を要するものではあるが、キリスト教あるいはキリスト教思想がまさにこうした文脈で問われていること、またここに現代キリスト教思想の主要なテーマの一つがあることは否定できない。そこで、本特殊講義においても、こうした問題状況を念頭に置いて、とくに、近代／ポスト近代、アジア・東アジアといった視点に留意しつつ、キリスト教思想における社会、政治、民族に関わる諸問題を取り上げることにしたい。本年度は、昨年度までの講義内容を総括した上で、以下の諸問題が取り上げられる。

１．「政治的なもの」と宗教社会主義
　　ティリッヒ、シュミット、アーレント、ムフ、アガンベンらを手掛かりに。
２．キリスト教思想における「経済」の諸問題
　　プロテスタンティズムと資本主義との関わり、新しい経済神学の動向、経済と環境（キリスト教思想と経済環境論）など。
３．東アジアの近代化とキリスト教
　　近代日本キリスト教研究に関わる方法論的考察、キリスト教と民族論との関わりなどを含む。

＜講義スケジュール＞

前期

オリエンテーション	
序論　宗教と社会・政治・民族	4/14
Ⅰ　「政治的なもの」とキリスト教	
１　キリスト教社会主義と宗教社会主義	4/21
２　「政治的なもの」―シュミット、アーレント、ムフ―	5/12
３　国民国家とアナーキズム	5/19
４　主権論とホモ・サケル―アガンベン―	5/26
５　ティリッヒと意味の形而上学	6/2
６　ティリッヒと宗教社会主義	6/9
Ⅱ　キリスト教思想と経済	
１　聖書の宗教と経済	6/16
２　キリスト教と資本主義	6/23

３　経済の神学と公共性　6/30
４　経済と環境、あるいは政治の復権　7/7
Exkurs　キリスト教から見た東アジアの多様性―家族・死者儀礼―　4/28

後期
Ⅲ　東アジアの近代化とキリスト教思想
オリエンテーション　10/6
１.「アジアのキリスト教」研究をめぐる方法論的考察
１－１：研究状況と問題点　10/13
１－２:「アジアのキリスト教」の問題構造　10/20
２.「アジアのキリスト教」の諸問題
２－１：近代化・貧困・開発　10/27
２－２：伝統的宗教文化と家族　11/10
２－３：ナショナリズム　11/17
２－４：宗教的多元性と宗教間対話　12/1
1/12
Exkurs　ティリッヒ研究１　12/8
ティリッヒ研究２　1/5

＜後期の講義内容の位置づけ＞
A.特殊講義以前
ティリッヒと現代キリスト教思想（学生時代・博士論文）
現代宗教学（京大赴任以前）

B.これまでの特殊講義の文脈で
研究プログラム
１．現代キリスト教思想の新しい可能性
1)キリスト教信仰の基本構造と動態（1995-1999）
宗教言語論、意味論、テキスト解釈学と聖書学
2)キリスト教思想と自然の諸問題（2000-2006）
「宗教と科学」関係論、形而上学再考、自然神学、環境・生命・こころ
3)キリスト教思想における社会・政治・民族（2007-）
近代／ポスト近代
公共性、民族、政治、経済

↓　↑
4)どこで・どの視点で議論を具体化するのか(2009・後期-)
具体的状況への適用と検証
アジアあるいは日本

２．宗教哲学の新たなる構想（2015 年度以降？）
　これまでの演習・特殊講義の内容を統合するものとして。

＜後期講義内容＞
１．「アジアのキリスト教」研究の意義と方法論
・「アジアのキリスト教」の「の」をめぐって。
　「アジア」は、地理的区分か、言語的区分か。主体は、受け手は。
・キリスト教思想とアジア
　救済論的枠組みにおけるアジアの意義。地中海から大西洋、そして太平洋。
　植村、矢内原
　　アジアのキリスト教はキリスト教自体にとって普遍的意味を有するか？
　旧約と新約、接ぎ木　→　土着化論
・構造と時間軸：「問いと答え」「地平融合」
・アジア→東アジア→日本

２．古代キリスト教との比較
・地中海世界におけるキリスト教の歴史的展開をめぐって
　　キリスト教のギリシャ化あるいはローマ世界のキリスト教化
　　↓
　　ローマ帝国におけるキリスト教国教化と正統キリスト教会の成立
・その前提
　宇宙論的枠組みにおける思想
　ペリカン
・その結果
　キリスト教自然神学とそれを基盤としたキリスト教文化世界の構築
　　↓
　アジアの場合はどうか。

３．「アジアのキリスト教」の諸問題
・伝統（キリスト教的）と近代
・アジアの伝統的宗教文化とキリスト教
　↓
　争点：宗教的多元性・重層構造、民族と家族
　　近代化による変容

＜引用＞
１．植村正久「日本のキリスト教と武士」（M35）
「ユダヤにおけるイエス最初の弟子は漁師や、農夫や、税吏やであったのに、日本初代

の弟子にはいずれも武士の子が選ばれた。神の選びは実に不思議なものである。」（『植村正久著作集１』新教出版社、415-416頁）

２．矢内原忠雄「基督教と日本」（S16）

「欧米諸国に於ける基督教はほぼ終りに近づいている」、「基督教の展開としてみたる場合に、欧米諸国の為しうる貢献はほぼし尽したのであります」、「基督教がまだ本当に試みられてをらないところの世界的強国は、わが国であります」（『国家の理想――戦時評論集』岩波書店、436頁）

「茲に於て基督教の日本的把握という事が問題となります。日本的把握というのは何であるか。日本人の心によって基督教を把握するという事であります」、「基督教はアジアから興ったのであります。イエス・キリストはアジア人である。聖書はアジア人の心でなければわからない。少くともアジア人の心でなければわからない所があるに違いない。あるんです」（437 頁）

３．Jaroslav Perikan, *What Has Athens To Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press, 1997.

Almost as soon as Christianity had gone beyond Greek to speak and write in Latin, it began to raise fundamental questions about that counterpoint. "What has Athens to do with Jerusalem?" ［Quid Athenae Hierosolymis?］, asked Tertullian, the first important Latin Christian author. The answer of Tertullian to his own question was that the faithful disciple of Jerusalem did not really need to become a pupil of Athens as well.（2）

The theme of that counterpoint in the *Book of Wisdom*, moreover, was not the conjunction of Isaiah and Virgil on the birth of the Child nor conjunction of David and the Sibyl on the end of the world but the conjunction of *Genesis* and *Timaeus* on the beginning of the world. Having almost certainly been composed originally in Greek rather than in Hebrew, the *Wisdom of Solomon* is not only the most Hellenized but also arguably the most "philosophical" book in the Bible. That, too, was a reflection and an adumbration, for it would be as a philosophical-theological cosmogony that the combination of *Timaeus* and *Genesis* would present itself to Judaism in Alexandria and then to Christianity in New Rome and in Catholic Rome.

This book deals with that question of cosmogony, the doctrine of beginnings and of origins, as the question was posed for Roman culture from classical Rome to Catholic Rome by the counterpoint between the *Genesis* of Moses and the *Timaeus* of Plato.（3）

Ⅰ．Classical Rome:"Description of the Universe"（Timaeus 90E）as Philosophy

Ⅱ．Athens: *Geneseos Arthe* as "The Principle of Becoming"（Tomaeus 29D-E）

Ⅲ．Jerusalem: *Genesis* as a "Likely Account"（Timaeus 29D）of One God Almighty Maker

Ⅳ．Alexandria: The God of *Genesis* as "Maker and Father"（Timaeus 28C）

Ⅴ．New Rome: Christ as "God Made Perceptible to the Senses," "Only-Begotten God," and "Image of the God Apprehensible Only to the Mind"（Timaeus 92C）

Ⅵ．Catholic Rome: The Trinity as "Source, Guide, and Goal"（Timaeus 27C-42D）